令和6年度　北部地区子ども支援net　議事録

日　時： 令和6年6月21日（金）　13：30　～　16：00

場　所： 龍郷町役場 2階会議室

参加者：　49 名（※詳細は別紙）

1. 開会あいさつ

龍郷町子ども子育て応援課

課長補佐　小林 いずみ 氏

2. 自己紹介

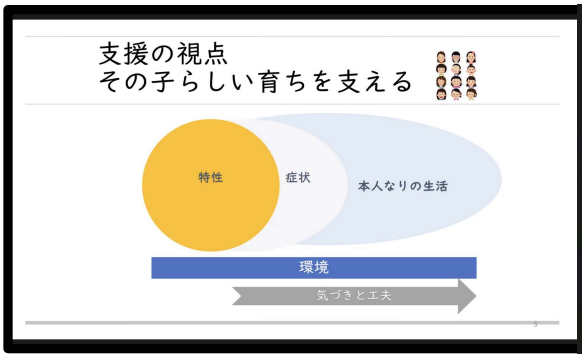
3. 説明　（事務局）

奄美地区地域自立支援協議会について

4. ミニ研修

「発達支援における保護者との連携について」

鹿児島大大学院臨床心理研究科　准教授　**高橋 佳代** 氏



5. グループワーク

「奄美北部での困り感のある子どもや、その家族を支える人たちの連携について」

1グループ

- ○ 聖隷かがやき①
- ○ 奄美病院①
- ○ 大勝保育所
- ○ 奄美市教委（SSW）①
- ○ 大島児童相談所
- ○ 龍郷町子ども子育て応援課

・保護者への伝え方、子どもへの伝え方を考えたときに、親の立場、子どもの気持ちをそれぞれを理解した上で伝え方を工夫する必要がある。
・育て方等に違いがある事も理解した上で、接し方を工夫し、関係性が続けられるような対応が必要。
・保護者によっては、関わりのうまく行かなさから虐待と誤解されたりすることもあり、傷つき周囲を拒絶している状況にあるかたもいる。
・家族全体の様子を理解する（両親、祖父母の生活歴までみていかないとその家庭の家庭支援はできない。）
・関係機関につなげられるタイミングをつかむためには、日常的な関わりを心がけるなど、日頃からの関係性作りが大事。そのためにも、決めつけて支援することはせず、共感、傾聴の意識をもって関わっていく。

2グループ

- ○ 愛かな
- ○ あゆみ（相談支援）
- ○ 緑が丘小
- ○ 奄美市教委（SSW)②
- ○ 名瀬保健所①

・母子（父子）家庭で家事ができておらず、いじめの対象となりうるような状況があっても、本人たちはそう思っていないことが多い。（子供たちだけで過ごしているため、「ほかを知らない」「良い悪いの判断がつかない」「その方が幸せだと思っている」などの状況がある）
⇒本人が困っていないと思っていても、関わり、信頼関係を築いていくことが大事。（何かあった時にすぐに支援に入ることができるような関係性作り）
・「どこにどのようにつなげるのか」「どうやって発見するのか」という課題がある。
⇒民生委員は、地元の人なので、関係性がぎくしゃくすると困る。学校は、気が付いても、家庭まで踏み込んでいけないこともある。
・スクールソーシャルワーカーなどが、どこでもいけるような仕組みつくりが必要。
・子どもたちが、どんな大人に出会うか、この人に出会えてよかったと思ってもらえるように関わっていきたい。
・各関係機関で気づいたことをどこつなげるか。
・自分たちがどこまで関われるのか、限界があったりするが、今日いろんな方と話ができたので、まずは支援者で顔合を合わせ、話しやすい関係性作りができたのが今日の収穫だった。

3グループ

- ○ 聖隷かがやき②
- ○ てぃだ（相談支援）
- ○ 佐仁小
- ○ 奄美市教委（SSW)③

・支える人たちの連携について確認。幼保から小学校へは進学の際に移行支援シートなどを利用している。小学校から中学校の引継ぎについては、3月に小中連絡会が実施されている。
・奄美市の場合は年に4回「ジョイントプラン」といって、小学校、中学校の教員が集まってケースについて検討する機会がある。その中で家庭情報なども含め共有している。（特別支援関係の話題があがることもある）
・保護者との関りについて、連絡方法の難しさを共有。「連絡帳」「電話」「直接話す」などいろんな方法があるが、最近はLINEでやり取りする場合もある。
・文章でやり取りする場合の困り感として、表現方法をどうするのかという迷いがあるという話題も出た。
・電話は保護者の方が構える可能性があるため、本人の良いところを話題にするとよいという意見が出された。
・名瀬中では「よーりよーりホットサロン」というお話会が月1回開催されている。保護者は誰でも参加できるイベントで、フリートークだが保護者同士で悩みを相談しあったり、共有する場になるだけでなく、保護者が学校に足を運ぶ機会にもなるためすごく良い。そのような場所に関係機関が参加するともっと広がっていくんじゃないかという意見があった。
・今後も連携をさらに広げる、深めていく必要がある。

4グループ

- ○ にこぴあ
- ○ チャレンジドサポート奄美①（相談支援）
- ○ 赤木名保育所
- ○ 大島北高①
- ○ 赤徳小①

・医的ケア児の支援に関して、地域の看護師の連携も重要。
・保育所等訪問では、学校との交流をしていく上で大きなハードルがあると感じる。
・個々の違いがあるが、どこまで集団にあわせたらよいかということも話題になった。
・保護者ではなく、子ども自身がどうありたいかというところに視点を向けることが大切。
・療育では、本人が苦手なところを出来るようにするというよりは、得意な所を伸ばすという意識で支援している。
・本人がのびのび出来る環境においてあげたいという思いがある。
・保護者に上手く伝えたいが伝わらないというジレンマがある。
※それぞれの悩みや現場の意見を出し合ったり、相談しあうことができ、盛り上がった時間になった。
※子どもたちの為には、個性や特性に対して「早期発見」「サポートの仕方の共有」などが大切だということを共有することができた。
※グレーゾーンのまま進学し、高校で困っている場合がある。それまでの過程でどのように支援や対応すればよかったのか。という中身の濃い話ができて満足している。

5グループ

- ○ 聖隷かがやき③
- ○ 奄美病院②
- ○ 大島北高②
- ○ 赤徳小②
- ○ 奄美市教委（SSW)④

・保護者も相談する機関や繋がれる場所などを知らずにそのまま来ている家庭が多い。
・支援者として、ネットなど子どもの世界に追いつけないと感じることもあるが、子ども達に色々教えてもらいながら、関係性を築いている。
・幼少期から支援など関わりのあった子は、SOSの出し方や人への頼り方がわかっていることが多い。そのような状況をみると、必要な時期に関わることの大切さを感じる。
・グループの参加者から、前半の研修を聴いて「自分の物差しで保護者と話をしない」「押し付けないという態度」キーワードについて共感の意見が多く出された。また、自分自身もちゃんと振り返ることが大切だという意見もあった。
・どの段階でも「つなぐ連携」が大事でその意識でいると、つながる支援がしっかりできる。好事例として、小学校、中学校時代に学校に通うことができなかったお子さんでも、支援者がしっかり関わっていたことで、高校では楽しく通えているという事例も出された。
・医療機関にいながら小さいころから誰かしらが関わっていること、どの段階でも誰かが関わっている。切れてしまいそうなときに誰かにつながっていることが大事。

6グループ

- ○ ハートリハ龍郷
- ○ 円小
- ○ 奄美市教委（SSW)⑤
- ○ 大勝学童
- ○ 名瀬保健所②

・子どもの支援には保護者の理解が不可欠だが、保護者の方へ支援学級を勧めていく中で、祖父母が出てきて説得に時間がかかってしまうことがある。その間に本人は困りが強くなってしまうこともある。（偏見が強い）
・親支援も大切。いろいろな機関と連携しながら保護者を傷つけないように寄り添う支援が大切。
・学童でもいろんな困り感があり支援している。学校を休みがちになっている子どもに学童で話をきいたり、好きなことは何かなどの情報から保護者とつながるようになったという事例を共有した。保護者の意見を尊重しながら、学童から療育につながったという事例も出された。
・保護者の困り感をキャッチできたところが、つなげるべき機関につなげる意識でいればよい。知り得た情報を関係者で共有できる仕組みが必要。

7グループ

- ○ チャレンジドサポート奄美②（相談支援）
- ○ 宇宿保育所
- ○ 大島特別支援学校
- ○ 奄美市教委（SSW）⑥
- ○ 笠利いきいき健康課

・「支援級ではなく支援員をつけてほしい」「大人数が苦手なので少人数で手厚くしてほしい」等の要望も多く、保護者の理解と学校現場の思いが合致しないがある。（教員が足りていない現状もある。）
・通常学級に個別対応が必要な子どもや、外国籍の子どもがいるなど、担任ひとりでは対応が難しいケースもある。
・発達特性が気になり就学相談につなげたいが、保護者の認識がまだそこまで達していない場合、保護者にどのように伝えたら良いか難しい場合もある。保護者の理解を拡げるためには、保護者との情報共有、情報交換が大事。
・就学相談でも保護者と話をするが、学校や保育所等から情報提供や啓発活動をしていただく必要があると感じる。
・就学相談の存在について、意外と「知りませんでした」という方もいる。奄美市は７月半ばくらいに、龍郷町は８月頭頃に実施している。（各機関にも連絡が来たら案内してほしい）
・学校での困り感を共有したときに、保護者は「家では困っていない」ということも多い。この場合、保護者が予防的に関われているため家庭では困り感として出ていないということがある。学校側の伝え方として「学校が困っている」ではなく「子どもの困り感を具体的に伝える」「保護者が家庭で行っている予防的な対応を褒める」などを意識しながら関わることが大切。（「〇〇さん、ご家庭で頑張っていますね。」と伝えた後に、学校での困っている様子を伝え、支援学級や相談先を提案するなど）
・笠利地区では未就学児支援の取組として、親子教室（かがやきハッピークラス）がある。年中時の保護者への就学説明会もすすめている。奄美市の場合、年長になってからは、学校教育課やいきいき健康課が連携をはかりながら情報共有できる機会があるが、その前段階として、早め早めに話ができるのは良い取り組みである。
・発達検査の前にチャレンジドサポートへ相談があるが、療育相談自体が検査ありきではないので、チャレンジドサポートに繋ぐときには、「お話をしてみたらどうですか」というスタンスで進めていただくとよい。
・転勤や部署が変わったりで新しい環境になった時に言いにくい、伝えにくいことがあるが伝えないといけないことは人が変わったからといって支援がとぎれることがないようにしなければならない。

8グループ

- ○ のぞみ園（相談支援）
- ○ 奄美中央病院
- ○ 龍瀬小
- ○ 奄美市教委（SSW)⑦

・特性のある子に携わる周囲の環境（学校、保護者、同級生等）に対して、「こういうことは認めてあげてほしい」「出来るまでにちょっと時間がかかる」などを伝え、理解してもらうということも必要である。
・発達がグレーゾーンの子どもさんを支援していく上で「学校と家庭の連携」が大切。その際に、学校では誰に伝えたらいいのか、どのように連携をしていったらいいのかなどに難しさを感じることが多い。
・中学進学にあたり、通常学級に戻りたいという方も多い（高校進学に向けて）
・いろんな問題を抱える子に共通していることとして、「食に関する問題」もある。特に偏食（食べない、食べれない）から、「体の線が細い」「朝食べないので集中力がない」「勉強がわからなくなる」「体力がつかない」などの付随する課題が出てくる。
・学校の教員も子どもたちに食べさせることにすごく負担を感じている。
・子どもたちの咀嚼、かむ力も弱まっているように感じる。かといって昔のように子どもたちに「食べなさい」という指導もできないという難しさがあるというような意見を共有した。

9グループ

- ○　聖隷かがやき（相談支援）
- ○　赤徳保育所
- ○　龍郷小
- ○　奄美市教委（SSW）⑧
- ○　笠利いきいき健康課

・龍郷町では子どもが増えており、たくさんいるが人手が足りない現状がある。（保育士不足）

・保育所等で支援が必要だと感じた時に、保護者が支援を受けることを拒んだ時にどうしたらよいかという困り感があった時に「親子教室の活用」や「保育参観の際に子どもが集団の中でどのような活動をしているか」などの場面を見てもらうことで、親御さんにも気づきがあるのではないかという意見がだされた。

・かがやきでは親子教室ハッピーを年齢別で月１回やっている。参加してもらい、活動の内容がわかれば親御さんも積極的になれるのではないか。

・保護者同士が、コミュニケーションを取れる場所があることが大切

・保護者は頑張っている。いろいろな情報が簡単に取り寄せられる時代でインスタなどからも、キラキラした子育てを目にすることができる。それらを見ることで他の保護者も頑張ろうと思えることもある。

・島の良さを生かし、大人がのんびりした気持ちで子育てをしていけば、子どももゆっくり育つのではないか。